

【使徒書日課】使徒言行録 13章13～25節

¹³パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。¹⁴パウロとバルナバはペルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。¹⁵律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言させた。¹⁶そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。¹⁷この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。¹⁸神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、¹⁹カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。²⁰これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。²¹後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、²²それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』²³神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。²⁴ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣傳伝えました。²⁵その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から来られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

【福音書日課】マルコによる福音書 6章14～29節

¹⁴イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」¹⁵そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。¹⁶ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。¹⁷実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。¹⁸ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。¹⁹そこで、ヘロ

ディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。²⁰なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。²¹ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、²²ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、²³更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。²⁴少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。²⁵早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。²⁶王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。²⁷そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、²⁸盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。²⁹ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

神に選び出されて【こども説教のために】

わたしたちは、一人ひとりそれぞれに違う毎日の生活を送ってきましたが、日曜日の朝、教会に集められ、一つの礼拝に加えられました。わたしたち皆が神のご計画の中にあることを知るようにされるためです。

天の御父である神がお送りくださった御子イエスは、弟子たちを従わせてお働きを始めた頃、「この人は**洗礼者ヨハネが…生き返ったのだ**」と人々に言われたことがありました。洗礼者ヨハネは、有名な宗教家で、多くの人を悔い改めさせて神に立ち帰らせ、洗礼を授けていましたが、自分の行いの間違いを厳しく責められたヘロデ王の命令で首をはねられ、死んでいました。そのヨハネが生き返って主イエスとして現れたと、人々は言ったのです。もちろん、主イエスはヨハネの生き返りではありません。それどころか、ヨハネが生きていたときに、主イエスはヨハネから洗礼を受けられてもいたのです。主イエスを御子としてお送りくださった神は、主イエスがそのお働きを始められるように、前もってヨハネを選び出してくださっていたのです。

パウロは、ヨハネよりも前の旧約聖書に伝えられている人々が皆、そのときごとに神に選び出された人々で、後に続く人々のために用いられてきた、と教えました。主イエスに選ばれた弟子たちは、後に続く人々のために用いられました。弟子たちに続いた人々は、教会として歩み、さらに後に続く人々のために用いられる生き方をしてきました。わたしたちも、後に続く人々のために選び出されてきました。こうして、神はご計画をお進めなのです。

「用いられたい」

先週今週と、北支区内の教会で牧師就任式が三件続いています。今年度は、四月と五月に一件ずつの牧師就任式がありました。これらの就任式には、牧師・伝道師また役員が手分けして参列しています。特に役割があるわけではありませんが、可能な限り誰かが参列するように、役員会で毎回調整をしてきました。それぞれの教会に牧師・伝道師を立てることは、ただその教会の営みということにとどまりません。教区・支区の責任で、それぞれの教会に牧師・伝道師を立てるのです。ですから、同じ教区・支区に属する教会は、互いに牧師・伝道師を立てる責任を負っているのです。わたしどもも、十年前の六月に、ここで就任式を執り行っていました。多くの教区・支区の教会から、また関係教会からご参列いただいて執り行われた就任式で、わたしどもはこの教会の牧師・伝道師として立てられたのです。

わたしたちの教会が送り出した伝道者、榊原かをる師の読谷教会伝道師就任式が七月に執り行われるという案内が届いています。読谷教会は、まもなく創立 120 周年を迎える歴史ある教会です。その歴史を受け継ぐ教師として、伝道師に就任されます。沖縄教区の副議長が司式をされ、教区内外の諸教会から参列者を迎えて執り行われるはずですが。役員会では、石神井教会から参列者を派遣することも検討しましたが、今回は諸事情で見送ることとしました。かわりに、祝電を発信し、祝い花を贈ります。有志の皆さんに寄せ書きを準備していただいていますから、これもお届けする予定です。

多くの者に支えられながら、一人の教師が一つの教会の牧師・伝道師として就任いたします。この営みを、教会は大切にしてきました。単なる形式的な儀式ではないのです。この営みを通して、教会に立てられる牧師・伝道師は、諸教会の交わりという大きな営みの中でその働きに用いられるということ、あらためて確かめさせられます。

伝道者は、「神のご計画のうちに宣教の働きに用いられたい」との願いを持っています。もちろん、キリスト者であればだれでも、「神に用いられたい」という献身の思いを抱えていることでしょう。わたしたちは皆、神に仕え、人に仕えるために、召されてキリストに従う道に導かれてきたのです。だれかに仕えられるためではありませんし、自分を救うためでもありません。神に対して、そして人に対して、用いられ、仕えるべきところを、わたしたちは皆、悩みながら、模索しながら、探し求めています。伝道献身者であれば、その思いは、なおのこと強いものです。だからこそ、ときに「もっと大きな働きに用いられたい」との誘惑に捕らわれます。「もっと自分にふさわしい働きに用いられたい」と悩みます。けれども、わたしたちは皆、ずっと大きな働きの中のほんの一部を担うように選び出され、用いられる者なのです。

神のご計画の中で

わたしたちは、先達から受け継いできたものの中で生かされ、この時代に、今置かれたところで、どのように用いていただけるのかと神に問いながら、人生の歩みを進める者たちです。主イエスの弟子たちの時代から教会の営みを通して受け継いできたことがあります。それだけでなく、教会の営みの外で、この世界の歴史を通して受け継いできたこともあります。教会の営みであろうと、そうでなかろうと、すべてのことが正しいとも、あらゆることが善だとも言えないものを、先達から受け継いでいます。そのような受け継いだものの中にしか、今のわたしたちの立つ場所はありません。そのようなところに立つ者として、わたしたちは、神に用いられようとしているのです。

パウロは、安息日の会堂で「**励ましのお言葉**」を求められたとき、自分たちが先達から受け継いできたことを語りました。**わたしたちの先祖**のこと、**預言者サムエルと裁く者たち**のこと、**サウル王**のこと、**ダビデ王**のこと、そして、**救い主イエスとヨハネ**のこと、です。主イエスとヨハネのことを除けば、「旧約聖書」が物語るイスラエルの歴史に登場する人々です。もちろん、その登場人物の中のほんの一部です。もっと多くの人物を取り上げて、詳しく語ることもできたでしょう。けれども、限られた人物だけを取り上げました。**わたしたちの先祖**を除けば、イスラエルの指導者たちと言ってよいでしょう。必ずしも、すべてを肯定的に評価できるような人物ばかりではありません。むしろ欠け多く、失敗をした人々といったほうが良いかもしれません。**先祖**たちは、荒れ野で不平不満を言い募り続けた民でした。**サウル王**は、晩年、神からの悪霊にさいなまれるようになった人でした。**ダビデ王**も、自分自身や家族のことでは失敗を犯し、泣き悲しむことの多かった人です。そのような人物ばかりを取り上げて、パウロは、「神はこの人たちを選び、用いられて、歴史の中でご計画をお進めになられた」と語ったのです。彼らは皆、知ってか知らずか、神のご計画の働きを受け継ぎ、用いられたのです。

良く知られた「三人の石工の寓話」があります。ある人が、石切り場で作業している三人の男たちに、「何をしているのか」と尋ねます。一人目は、「これで生活費を稼いでいる」と答えます。二人目は、「この国一番の石切りの仕事をしている」と答えます。しかし、三人目は、「自分は大聖堂の建設に携わっている」と答えるのです。

わたしたちは、教会の営みを先達から受け継いできました。ここで、わたしたちは、大きな神のご計画の中に生かされていることを確かめるように導かれています。今、自分が用いられているという実感がなくても、神は一人ひとりをお用いになるために、生かしてくださっているのです。そうであればこそ、人の思いを越えた神のご計画を知ることが願うのです。